

## I-1. 講義番組における命題の提示

ディレクター 土 屋 二 彦

### 1. 問 題

平成5年度から放送の講義番組『ヨーロッパ論Ⅱ』では毎回の番組の冒頭で、内容のポイントを「画面上に命題で提示する」という形式をとった。

たとえば第一回「ヨーロッパとは何か（一）」の冒頭は次のようになっている。

（講師）今日お話したいことは次の四点です。

- （画面）1) 今なぜヨーロッパを学ぶのか  
2) ヨーロッパは超民族的文化共同体である  
3) 三時代区分はヨーロッパ理解のさまたげになる  
4) ヨーロッパ史の新しい時代区分とは何か

本稿では、このような構成形式をとるにいたった経緯を記し、「伝達性の高い、分かりやすい講義番組の構成はいかにあるべきか」という問題についての一考察としたい。

### 2. ある提案

『ヨーロッパ論Ⅱ』の制作を担当することがきまった時のことである。担当ディレクターとしてまず必要なのは、主任講師が講義の内容および方法について全般的にどのような考え方を持っているかということ把握することである。

澤田昭夫主任講師に最初にお会いした時に、何か参考に読ませていただくものはないかおたずねした。澤田先生がそこで出して下さった本は、①『ヨーロッパ史』澤田昭夫著（明玄書房）、②『論文の書き方』澤田昭夫著（講談社学術文庫）の二点であった。

①は講義内容の概略や考え方をこれで知るようということであり、②はロングセラーとしてよく読まれている本なので何か参考になればということであった。この中で私が特に関心をひかれたのは『論文の書き方』の中の次の文章であった。

論文が書けず、研究のしかたも知らない学生がますます多くなってきた。こういう印象を強くもつようになったのが、この本を書こうと思った動機です。

（中略）論文が書けない、研究方法を知らないというのは、なにも学生に限らず学者自身のことでもあるらしいのは当然でしょう。（中略）なにを主張し、なにを論証しようとしているのかわからないからです。（注1）

よい「話し」に最も重要なのは「何についての話しか」、それを明示したトピックを選ぶことです。講演や講義の依頼者から明確なトピックを示される場合は別ですが、ごく漠然とした「問題の場」を提示されるのがふつうですから、それをはっきりしたトピックに狭めなければなりません。はっきりしたトピックは「AはBである」という肯定形の、あるいは「AはBだろうか」という疑問形の

命題です。(中略) 大学の講義は、ひとつの大きな主題について、何週間にもわたって「話す」ことですが、各時間に、今日の細かいトピックが何であるかをはっきりさせておきたいものです。(注2)

私はこれを読んで一つの提案・依頼を、今回の講義担当の五人の講師の皆さんに行なうことを考えた。それは

“講義のポイントを「問題」または「命題」の形で番組の冒頭で提示する。”  
ということであった。講義番組の構成形式を、このようにしたいという提案であった。

ここでいう「問題と命題」は、いわば同じものの表と裏の関係にある。講義の場合、講師の考えの中に「AはBである」という命題表現ができていなければ「問題」を作成することはできない。そこで以下においてはこの二者を区別しないで使用することとしたい。

命題とは手近な哲学小辞典には「判断を言語で表したもの」とあり、国語辞典には「一つの判断の内容を、整った言葉で表したもの」とある。いずれにしても命題とは「判断」の産物である。

また、トピック（ス）という言葉は日常的には「その時どきの話題」という意味で使われているが、上記の澤田先生の文章ではこの言葉の本来の意味に含まれている「論題」という意味であると理解した。

なお今回の『ヨーロッパ論Ⅱ』の主任講師による「講義のねらい」、および担当講師名は次のとおりであった。

〈講義のねらい〉 明治以来の日本が注目してきた、科学技術中心、富国強兵、国民国家中心のヨーロッパではなく、各国主権を超えた文化共同体としてのヨーロッパ。その多層、多面的構造を、ギリシャのルーツから今日のECにまでわたる長期的展望の中であきらかにする。欧州地域で起きた諸事件の概説ではなく、ヨーロッパ理念発展の歴史をとらえる。

主任講師 ・ 日本大学教授

澤田 昭夫

担当講師 ・ 上越教育大学教授

金澤 良樹

・ 湘南国際女子短期大学教授

吉村 忠典

・ 高千穂商科大学教授

澤田 マルガレーテ

・ 福岡女学院大学教授

稲垣 良典

### 3. 提案の背景

講義のポイントを「問題」または「命題」の形で、番組の冒頭で「文章ではっきり提示する」という構成の仕方を取りたい。このようなことを提案した背景として、つぎのような事情がある。

私はそれまでにディレクターとして講師と共に番組を作りながら、また一人の視聴者としていろいろな講義番組を見ながら、何か漠然とした不満を感じるがあった。講義を展開して

いる講師の「一つ一つの話」はそれなりに興味深いのだが、一回の講義全体をとおして「この講師は、結局何が言いたかったのだろう、何か説明したかったのだろう」ということを振り返って考えてみたとき、なんだかよく分からないことが時にあったのである。講師が「どのように判断し、何を主張しようとしているのか。何を論証しようとしているのか、または何を解説しようとしているのか」ということが、はっきりしないまま講義が終わってしまうことが往々にしてあったのである。澤田先生の表現によれば「ごく漠然とした問題の場は感じられるのですが、はっきりしたトピックが感じられない」ということである。

今回の番組担当のディレクターとしては、このようなことをなくしたい。明快な、説得力を持った、分かりやすい、高い伝達力を持った番組を作りたい・・・このような考えが、前述のような講師への提案・依頼となったのである。

#### 4. 講義内容案の書き方

放送大学では毎年「授業科目講義内容案」を作成している。ここには主任講師による各科目の「ねらい」、そしてまた担当講師の記述による15回各回の「テーマと内容」が記されている。「はっきりしたトピックが感じられない」のは、この講義内容案の書き方の段階から往々にして感じられる。

講義の「内容」というものは結局「文章の形式」で書かれていなければはっきり分からないのであるが、「○○と××」についてとか、単語や項目の列举にとどまっているものがある。○○と××がどうしたのであるか、どのような関係にあるということが講義されるのか。このようなことが文章で記述されていなければ「内容」はよく分からない。要するに講義の一番重要な部分が、述語をともなった命題、または問題の形式で書かれていることが必要なのである。

また、講義の形式を表わす言葉についても練られていないように感じられる。講義内容の各項目の結語の表現をみると、その言葉として・・・○○について考える。○○について学習する。○○を検討する。○○について論じる。○○を研究する。○○について展望する。○○を概観する。○○の可能性を探る等々、各種の表現が使用されているが、この表現に強い必然性が感じられない。ディレクターは番組をつくる時に、この言葉を中心において構成を考えることを“基本方針”としているので、この言葉がキーワードなのである。

各種の事情が異なる外国の例をあげることは、かならずしも適当ではないかもしれないが、「はっきりしたトピック」が感じられ、一つの講義形式を表現の中に持っている講義内容案（授業のねらい）を目にしたので参照してみたい。

これは「何人かのアメリカの大学教授が実際に用いている教育社会学の授業のシラバスを参考に、若干の修正と省略を加えて、日本語として作りなおしたものである」という説明のもとに紹介されているものである。<sup>(注3)</sup>

1991年冬学期 「社会的機会と教育政策」の授業のねらい
授業のねらい： このコースでは次の問題について検討する。

- (1) 若者たちはどのようにして社会のなかで自分の占める地位を獲得するのか。
- (2) 社会は、そのプロセスにどのようにかわり、若者たちの選択を行なうのか。
- (3) 選抜の過程を人々はどのように通過していくのか。
- (4) その過程は、能力、個人の選択、親の期待とプレッシャー、学校、性別、人種、社会階級といった要因とどのように結びついているのか。

この書き方の要点は、内容項目が「問題」の形式で提示されているということである。主語一述語をともなった文章の形式で、(命題を前提とした)問題の形式で記述されているということである。伝達性の高い記述形式である。

なお今回の『ヨーロッパ論Ⅱ』の講義番組を制作している間に、トマス・アクイナスの「神学大全」を資料として引用することがあった。翻訳書全18巻の内の第8巻の「本文目次」は次のような形式をもったものであった。(注4)

**第五十七問題 権利について**

- 第一項 権利は正義の対象であるか
- 第二項 権利を自然権と実定権とに区別するのは適切であるか
- 第三項 万民法は自然法と同一であるか
- 第四項 父権および家長権は特別に区別すべきであるか

**第五十八問題 正義について**

- 第一項 「正義は各人にかれの権利を帰属させようとする不動にして恒久的な意志である」という定義は適切であるか
- 第二項 正義は常に他者にたいするものであるか
- 第三項 正義は徳であるか

(以下略)

前述の「社会的機会と教育政策の授業のねらい」の書き方も、このような伝統の流れから形づくられてきているのであろうか。

## 5. 問題・命題の作成

以上のような考えから、「命題を番組の冒頭に文章で提示する」という方法をとりたいということをあらためて澤田主任講師に提案した。澤田講師は笑いながら「言うは易く、行なうは難し」ですがといいながら了承された。そこであらためて澤田先生以外の四名の担当講師にもはかったところ、各担当講師にも了承された。

具体的な問題・命題の作成段階では、担当講師と多大な打ち合わせ時間が必要となったものもあった。以下その一例を紹介したい。

第1回 ヨーロッパとは何か (一)

- 1) 今なぜヨーロッパを学ぶのか
- 2) ヨーロッパは超民族的文化共同体である

3) 三時代区分はヨーロッパ理解のさまたげになる

4) ヨーロッパ史の新しい時代区分とは何か

番組の作成を始めた当初、できればすべて「命題」の形で提示をおこないたいとも考えたが、それはかならずしも適切ではないことが分かった。この回については上記のように命題形式が二項目、問題形式が二項目となった。

#### 第2回 ヨーロッパのギリシア起源

1) ヨーロッパという言葉はどこから来たか

2) 古代ギリシアではヨーロッパは漠とした意識にすぎなかった

3) ヨーロッパ意識よりもヘレネス対バルバロイ意識が強かった

#### 第3回 ヨーロッパ文化のギリシア的要素

1) ヨーロッパはギリシアから何を学んだか

2) ヨーロッパ型教養の原点は弁論・修辞であった

3) 近代の民主主義思想はギリシアから直接得られたものではない

このギリシアについての講義内容を命題で表現することについては苦心があった。

演出上、テレビの一画面で「命題を一覧したい」「命題は簡単、明瞭なものでなければ表現効果がない」ということから、一つの命題を30字以内で表現していただくようお願いした。これはどの担当講師にとっても大問題であった。長年の研究、膨大な話の内容を簡単な文章で提示するということは、心理的に多大な抵抗がともなうことであった。ディレクター自身も日頃、画面に文字を出すときに、その数を少なくするのに苦労を重ねているので、その問題については十分想像がつく。しかしあるメディアにはメディアに即した情報の提示法がある。それを生かさなければ、そのメディアで伝達する意味がうすれてしまう。これはテレビにおいて、たとえば「現実の映像を活用することが重要だ」というようなことだけではない。文字の提示法についても同様である。画面上の文字表現は簡潔な表現でなされなければならない。

しかし講師の立場、学問の立場から考えれば「メディアの要請にしたがって表現をつくる」ということに大きな抵抗感があるのも当然である。なかなか適当な表現ができあがらず、命題提示の形式をあきらめようかという段階もあった。しかし最終的には次のような作業のすえ、命題を設定することができた。

たとえば上記第3回、項目3の命題の印刷教材（テキスト）上の見出しは「ヨーロッパと古代ギリシアの民主主義」であった。この「〇〇と××」という表現形式ならば、通常どおりである。しかし、これをなんとか命題の形にもっていきたい。講師に「この部分で結論としてお話になりたいことは何なのでしょうか」ということをお尋ねした。それは「近代民主主義とギリシア民主主義とは、どのような関係にあるか」ということであるとのことであった。では、この問題の形で画面に出すことにしましょうと提案した。しかし、しばらくして講師から「近代民主主義はギリシャに直接はつながらない」という表現がでた。しかし、なおかつ、この表現では不十分なようであった。さらに検討しているうちに「近代の民主主義思想はギリシアから直接得られたものではない」という命題にたどりついた。これならば無理なく話ができるということであった。この結果は28字の叙述文として画面に提示された。

できてしまえば、それまでのことのように感じられるのであるが、このようにまとまるまで

には、じつに時間のかかるものであった。このように「言い切ってしまう」には、さまざまな抵抗感があるにちがいない。しかしその条件、補足説明は番組のなかでしていただく。これが講義であってもよいのではないかとディレクターは考えるのであるが、完結した文章表現をめざす先生方には、この「言い切り」が非常な苦痛であったと想像されるのである。ディレクターとしては、場合によっては画面上に「不十分な文章表現」を意図的に出しておき、視聴者にまず考えてもらう。その後、口頭で十分な説明を付け加えていく。そこに画面情報と音声情報の二つのチャンネルを利用できるテレビメディアの特性があるのだ、というような計算もしてみたい。しかし画面上の文章だけで誤解を引き起こすことを恐れるという講師の気持も理解できるところであった。

このような経緯をもちながら作成された各回の全命題は次のようなものとなった。

## 6. 『ヨーロッパ論Ⅱ』の命題

- |     |                               |       |
|-----|-------------------------------|-------|
| 第1回 | ヨーロッパとは何か (一)                 | 澤田 昭夫 |
| 1)  | 今なぜヨーロッパを学ぶのか                 |       |
| 2)  | ヨーロッパは超民族的文化共同体である            |       |
| 3)  | 三時代区分はヨーロッパ理解のさまたげになる         |       |
| 4)  | ヨーロッパ史の新しい時代区分とは何か            |       |
| 第2回 | ヨーロッパのギリシア起源                  | 金澤 良樹 |
| 1)  | ヨーロッパという言葉はどこから来たか            |       |
| 2)  | 古代ギリシアではヨーロッパは漠とした意識にすぎなかった   |       |
| 3)  | ヨーロッパ意識よりもヘレネス対バルバロイ意識が強かった   |       |
| 第3回 | ヨーロッパ文化のギリシア的要素               | 金澤 良樹 |
| 1)  | ヨーロッパはギリシアから何を学んだか            |       |
| 2)  | ヨーロッパ型教養の原点は弁論・修辞であった         |       |
| 3)  | 近代の民主主義思想はギリシアから直接得られたものではない  |       |
| 第4回 | ローマ共和国とヨーロッパ                  | 吉村 忠典 |
| 1)  | ヨーロッパの前にオキシデントがあった            |       |
| 2)  | ローマ共和国は「国々」を支配する「国」であった       |       |
| 3)  | ローマ共和国は貴族に支配される「国」であった        |       |
| 第5回 | ローマ帝国とヨーロッパ                   | 吉村 忠典 |
| 1)  | ローマはキヴィタスを普及させた               |       |
| 2)  | ローマは地中海世界を「文明化」した             |       |
| 3)  | オキシデントのローマ化は「ヨーロッパ」を用意した      |       |
| 第6回 | 第一のヨーロッパとキリスト教社会の登場           | 澤田 昭夫 |
| 1)  | ローマ帝国が分裂し、歴史の軸は東西から南北へ転換する    |       |
| 2)  | 西方のゲルマン人キリスト教徒がヨーロッパ人と呼ばれはじめる |       |
| 3)  | フランク族のカール大帝の国がヨーロッパ王国となる      |       |
| 4)  | カールの帝国の崩壊と共にキリスト教社会が生まれる      |       |

- 第7回 キリスト教社会最盛期の文化 稲垣 良典
- 1) キリスト教社会の統一原理はローマ教会であった
  - 2) 修道院制度はキリスト教社会の改革と活力の源泉であった
  - 3) 大学は皇帝権・聖職権と並ぶキリスト教社会の柱であった
  - 4) スコラ学は共同的探求と批判的精神を特質とするものであった
- 第8回 キリスト教社会の衰退とヨーロッパの再生 澤田 昭夫
- 1) 教皇権と皇帝権がキリスト教社会の支配をめぐって競合する
  - 2) 民族主権の台頭でキリスト教社会が崩壊し始める
  - 3) ヨーロッパ人の世界像は拡大するがキリスト教社会は縮小する
  - 4) ヒューマニストがヨーロッパを再生させる
- 第9回 第二のヨーロッパ① キリスト教社会の民族化 澤田 昭夫
- 1) 第二のヨーロッパ社会は“水増し”されたキリスト教社会である
  - 2) 勢力均衡状態としてのヨーロッパで絶対主義的「国家」が生まれる
  - 3) 「啓蒙」がキリスト教社会の科学文明の推進に貢献する
  - 4) さまざまな統合・和平案は啓蒙思想の表現でもある
- 第10回 第二のヨーロッパ② 世界のヨーロッパ化 澤田 昭夫
- 1) 革命のナショナリズムが伝統的「民族」観と社会観とを変える
  - 2) ウィーン会議は「諸民族国家のヨーロッパ」「ヨーロッパ提携体制」を生む
  - 3) 「偉大なる社会」は世界をヨーロッパ化すると同時に崩壊の兆しを示す
  - 4) さまざまな色合のヨーロッパ連合、あるいは連邦計画が生まれる
- 第11回 ヨーロッパとは何か (二) 澤田 昭夫
- 1) ヨーロッパは単に「近代」ではなく多層の時間的蓄積である
  - 2) ヨーロッパは都市であり広場である
  - 3) ヨーロッパはパイデイアー（教養）の価値共同体である
- 第12回 自然法と法の支配 稲垣 良典
- 1) 「法の支配」原則は基本的なヨーロッパ的価値である
  - 2) 「法の支配」原則はギリシア哲学の「理性の支配」にさかのぼる
  - 3) 「法の支配」原則の理論的な基礎は自然法である
  - 4) 「法の支配」原則の確立は実定法主義ではできない
- 第13回 第三のヨーロッパ EC統合① 澤田 マルガレーテ
- 1) 民族主義克服意欲・平和繁栄願望が統合運動を生んだ
  - 2) 欧州統合の手段は超国家的構造の中での共同市場の創設だった
  - 3) 四つの機構がECを動かしている
- 第14回 第三のヨーロッパ EC統合② 澤田 マルガレーテ
- 1) 共同市場を創設するのは共同政策である
  - 2) 共同市場の完成は“一夜”ではできなかった
  - 3) 共同市場の完成は多くの政治的波及効果を生んだ
- 第15回 ヨーロッパとは何か (三) 澤田 昭夫

- 1) ヨーロッパは多面的空間である
- 2) ロシアはヨーロッパではない？アメリカはヨーロッパである？
- 3) ヨーロッパは対立の創造的緊張であり矛盾と墮落の反面教師である
- 4) ヨーロッパは普遍的価値追及の手掛かりである

## 7. 通常の方法

私がこの年に担当していた別の講義番組（ラジオ）で、担当講師がたまたま「今日のまとめ」として命題に相当することを三つあげた。この番組については講義の構成の仕方について、講師と打ち合わせを行なってはいなかったが、私は「講義における命題の提示の仕方」「命題を冒頭で提示するという方法」の是非などについてこの機会に講師の意見をお聞きした。その内容は概略つぎのようであった。

日本での人文系の講義の方法としては、最初から主題についての結論的な命題を言わないのが通常ようです。いろんな話をして、なんとなく主題についての認識が深まるようにするのです。冒頭で命題をだしてしまうと、話の内容、展開が不自由になります。また説明なしに唐突に命題を提示すると「誤解を招いたり、挙げ足をとられたりして」めんどうなことがおこりかねません。

私はさらに日頃、気になっていた次の問題についても意見をお聞きした。大学での講義の目的の一つは学生に問題を考えさせることにある。講師が冒頭で命題を結論的に提示してしまうと、その命題を強制しているようなことになるのではないか。この質問については「そのようなことはありません」とのことであった。私の質問は小中学校レベルのことであって、大学では、まず講師の主張を明らかにしなければいけないという意味として受けとった。

一般的に、日本ではある論点について、話の冒頭で、命題の形で、一種の「主張」を明確にだすことを嫌う気風があるように思われる。司馬遼太郎氏とドナルド・キーン氏の対談につきのような指摘がある。<sup>(注5)</sup>

司馬) 日本語は断定を嫌って、語尾をあいまいにしてまわりの様子を見ます。

キーン) 西洋人として聞きたがるのは、「である」か「でない」かの、どちらかです。「であろう」という場合は何パーセントの推測なのか、それを聞きたいところですが、日本人としては、それをぼかすことが日本語そのものだと思っている。はっきりしない言葉はフランス語ではないといいますが、日本語の場合は、はっきりしている言葉は日本語ではないといえます。日本語では、はっきりと線を引いて、これは善とか悪とか、あまり言いたくない。

司馬) 「と思われる」とかね。だれが思っているのか知りませんが。

このような気風が日常的な話だけではなく、論文や講義の展開のしかたにも反映しているように“思われる”のである。



## 8. 結 論

テレビの持つ伝達力は、ある面で強力なものがある。しかしテレビは「時間のメディア」である。情報が時間に乗ってどんどん流れていってしまう。印刷物にくらべて大変「細いメディア」であるというのが私の印象である。この時間のメディアを使いながら明確に伝達をおこなうためには、それなりに色々な方法が工夫されなければならない。

一般的なテレビ番組の構成法としては、冒頭において何か実感的な実例映像からはじめるのがよいとされている。しかし大学の講義のような場合には「命題」を冒頭にもってくることも重視されるべきではなかろうか。

『ヨーロッパ論』のように、講義の名称によく使われる「論」という言葉の意味は「自分の意見を主張し述べること」であるという。<sup>(注6)</sup>

講義内容を明確に伝達するために、講義の冒頭で内容を「命題」の形式で提示するという方法を、テレビというメディアも求めているのである。

- 
- |    |                                |      |
|----|--------------------------------|------|
| 注1 | 『論文の書き方』澤田 昭夫著（講談社学術文庫）        | 3頁   |
| 注2 | 同上                             | 187頁 |
| 注3 | 『アメリカの大学・日本の大学』荻谷 剛彦著（玉川大学出版部） | 136頁 |
| 注4 | 『神学大全』第18巻 稲垣 良典訳（創文社）         |      |
| 注5 | 『世界のなかの日本』（中央公論社）              | 165頁 |
| 注6 | 廣漠和辞典（大修館書店）「論の項」              |      |